

西班牙犬の家

(夢見心地になることの好きな人々のための短篇)

佐藤春夫

青空文庫

フラテ（犬の名）は急に駆け出して、蹄鍛冶屋ひづめかじやの横に折れる岐路のところ、私を待っている。この犬は非常に賢い犬で、私の年来の友達であるが、私の妻などは勿論もちろん大多数の人間などよりよほど賢い、と私は信じている。で、いつでも散歩に出る時には、きつとフラテを連れて出る。奴は時々、思いもかけぬようなところへ自分をつれてゆく。で、近頃ちかごろでは私は散歩といえ、自分でどこへ行こうなどと考えずに、この犬の行く方へだまつてついて行くことに決めているようなわけなのである。蹄鍛冶屋の横道は、私はまだ一度も歩かない。よし、犬の案内に任せて今日はそこを歩こう。そこで私はそこを曲る。その細い道はだらだらの坂道で、

時々ひどく曲りくねっている。おれはその道に沿うて犬について、景色を見るでもなく、考えるでもなく、ただぼんやりと空想に耽ふけつて歩く。時々、空を仰いで雲を見る。ひよいと道ばたの草の花が目につく。そこで私はその花を摘んで、自分の鼻の先で匂におうて見る。何という花だか知らないがいい匂である。指で摘つまんでくるるとまわしながら歩く。するとフラテは何かの拍子にそれを見つけて、ちよつと立とまって、首をかしげて、私の目のなかをのぞき込む。それを欲しいという顔つきである。そこでその花を投げてやる。犬は地面に落ちた花を、ちよつと嗅かいで見て、何だ、ビスケットじやなかったのかと言いたげである。そうしてまた急に駆け出す。こんな風にして私は二時間近くも歩いた。

歩いていくうちに我々はひどく高くへ登ったものと見える。そこはちよつとした見晴みはらしで、打開けた一面の畑の下に、遠くどこかの町とも知れない町が、雲と霞との間からぼんやりと見える。しばらくそれを見ていたが、たしかに町に相違ない。それにしてもあんな方角に、あれほどの人家のある場所があるとすれば、一たどい何処どこなのであろう。私は少し腑ふに落ちぬ氣持がする。しかし私はこの辺一帯の地理は一向に知らないのだから、解らないのも無理ではないが。それはそれとして、さて後うしろの方はと注意して見ると、そこは極くなだらかな傾斜で、遠くへ行けば行くほど低くなっているらしく、何でも一面の雑木林のようである。その雑木林はかなり深いようだ。そうしてさほど太くもない沢山の木の幹の

半面を照して、正午に間もない優しい春の日ざしが、榆にれや樫かしや栗や白樺などの芽生したばかりの爽さわやかな葉の透間から、煙のように、また匀においのように流れ込んで、その幹や地面やの日かげと日向との加減が、ちよつと口では言えない種類の美しさである。おれはこの雑木林の奥へ入って行きたい気もちになった。その林のなかは、かき別けねばならぬというほどの深い草原でもなく、行くことと思えばわけもないからだ。

私の友人のフラテも私と同じ考えであつたと見える。彼はうれしげにずんずんと林のなかへ這はい入ってゆく。私もその後に従うた。約一丁ばかり進んだかと思うころ、犬は今までの歩き方とは違うような足どりになった。気らかな今までの漫歩の態度ではなく、

織るようないそがしさに足を動かす。鼻を前の方につき出して
いる。これは何かを発見したに違いない。兎の足あとであつたのか、
それとも草のなかに鳥の巣でもあるのであろうか。あちらこちら
と気ぜわしげに行き来するうちに、犬はその行くべき道を発見し
たものらしく、真直ぐに進み初めた。私は少しばかり好奇心をも
つてその後を追うて行つた。我々は時々、交尾していらしい梢^{こずえ}
の野鳥を駭^{おどろ}かした。こうした早足で行くこと三十分ばかりで、犬
は急に立ちとまった。同時に私は潺^{せん}湲^{かん}たる水の音を聞きつけた
ような気がした。(一たいこの辺は泉の多い地方である) 犬は耳
を癩^{かんしょう}性^{しょう}らしく動かして二、三間ひきかえして、再び地面を嗅
ぐや、今度は左の方へ折れて歩み出した。思つたよりもこの林の

深いのに少しおどろいた。この地方にこんな広い雑木林がろうとは考えなかつたが、この工合ではこの林は二、三百町歩もあるかも知れない。犬の様子といい、いつまでもつづく林といい、おれは好奇心で一杯になって来た。こうしてまた二、三十分間ほど行くうちに、犬は再び立とまった。さて、わっ、わっ！という風に短く二声吠^ほえた。その時までは、つい気がつかずにいたが、直ぐ目の前に一軒の家があるのである。それにしても多少の不思議である、こんなところに唯一つ人の住家があるうとは。それが炭焼き小屋でない以上は。

打見たところ、この家には別に庭という風なものはない様子で、ただ唐突にその林のなかに雑^{まじ}っているのである。この「林のなか

に雑っている」という言葉はここでは一番よくはまる。今も言った通り私はすぐ目の前でこの家を発見したのだからして、その遠望の姿を知るわけにはいかぬ。また恐らくはこの家は、この地勢と位置とから考えて見てさほど遠くから認め得られようとも思えない。近づいてのこの家は、別段に変わった家とも思えない。ただその家は草屋根ではあつたけれども、普通の百姓家とはちよつと趣が違ふ。というのは、この家の窓はすべてガラス戸で西洋風な造^{こしら}え方なのである。ここから入口の見えないところを見ると、我々は今多分この家の背後と側面とに対して立っているものと思う。その角のところから二方面の壁の半分ずつほどを覆^{おお}うたつたかす^{ふせい}らだけが、言わばこの家のここからの姿に多少の風情と興味とを

具^{そな}えしめている装飾で、他は一見極く質朴な、こんな林のなかにありそうな家なのである。私は初め、これはこの林の番小屋ではないかしらと思つた。それにしては少し大きすぎる。またわざわざこんな家を建てて番をしなければならぬほどの林でもない。と思ひ直してこの最初の認定を否定した。ともかくも私はこの家へ這入つて見よう。道に迷うたものだと言つて、茶の一杯ももらつて持つて来た弁当に、我々は我々の空腹を満そう。と思つて、その家の正面だと思える方へ歩み出した。すると今まで目の方の注意によつて忘れられていたらしい耳の感覚が働いて、私は流れが近くにあることを知つた。さきに潺湲たる水声を耳にしたと思つたのはこの近所であつたのであろう。

正面へ廻つて見ると、そこも一面の林に面していた。ただここへ来て一つの奇異な事には、その家の入口は、家全体のつり合から考えてひどく贅ぜいたく沢にも立派な石の階段が丁度四級きだもついているのであった。その石は家の他の部分よりも、何故なぜか古くなつて所々苔が生えているのである。そうしてこの正面である南側の窓の下には家の壁に沿うて一列に、時を分たず咲くであろうと思える紅あかい小さな薔薇ばらの花が、わがもの顔に乱れ咲いていた。そればかりではない。その薔薇くさむらの叢くさむらの下から帯のような幅で、きらきらと日にかがやきながら、水が流れ出ているのである。それが一見どうしてもその家のなかから流れ出ているとしか思えない。私の家来のフラテはこの水をさも甘うまそうにしたたかに飲んでいた。私

は一瞥いちべつのうちつにこれらのものを自分の瞳ひとみへ刻みつけた。

さて私は静に石段の上を登る。ひっそりとしたこの四辺あたりの世界に対して、私の靴音は静寂を破るといふほどでもなく響いた。私は「おれは今、隠者か、でなければ魔法使の家を訪問しているのだぞ」と自分自身に戯れて見た。そうして私の犬の方を見ると、彼は別段変った風もなく、赤い舌を垂れて、尾をふっていた。

私はこつこつと西洋風の扉を西洋風にたたいて見た。内からは何の返答もない。私はもう一ぺん同じことを繰返さねばならなかった。内からはやっぱり返答がない。今度は声を出して案内を乞こうて見た。依然、何の反響もない。留守なのかしら空家あきやなのかしらと考えているうちに私は多少不気味になって来た。そこでそつ

と足音をぬすんで——これは何のためであつたかわからないが——薔薇のある方の窓のところへ立つて、そこから脊せのびをして内を見まわして見た。

窓にはこの家の外見とは似合しくない立派な品の、黒ずんだ海え老茶びちやにところどころ青い線の見えるどっしりとした窓かけがあつたけれども、それは半分ほどしぼつてあつたので部屋のなかはよく見えた。珍らしい事には、この部屋の中央には、石で彫つて出来た大きな水盤があつてその高さは床の上から二尺とはないが、その真中のところからは、水が湧わきた立つていて、水盤のふちからは不斷に水がこぼれている。そこで水盤には青い苔が生えて、その附近の床——これもやっぱり石であつた——は少ししめつぽ

く見える。そのこぼれた水が薔薇のなかからきらきら光りながら蛇のようにぬけ出して来る水なのだろうということ、後で考えながら見て解った。私はこの水盤には少なからず驚いた。ちよいと異風な家だとはさきほどから気がついたものの、こんな異体の知れない仕掛まであろうとは予想出来ないからだ。そこで私の好奇心は、一層注意ぶかく家の内部を窓越しに観察し始めた。床も石である、何という石だか知らないが、青白いような石で水で湿った部分は美しい青色であった。それが無造作に、切出した時の自然のままの面を利用して列ならべてある。入口から一番奥の方の壁にこれも石で出来たファイヤプレイスがあり、その右手には棚が三段ほどあって、何だか皿見たようなものが積み重ねたり、列んだり

している。それとは反対の側に——今、私のがぞいている南側の窓の三つあるうちの一番奥の隅すみの窓の下に大きな素木のままの裸の卓があつて、その上には……何があるのだから顔をぴたりくつつけても硝子ガラスが邪魔をして覗き込めないから見られない。おや待てよ、これは勿論空家ではない、それどころか、つい今のさきまで人がいたに相違ない。というのはその大きな卓の片隅から、吸いさしの煙草タバコから出る煙の糸が非常に静かに二尺ほど真直ぐに立ちのぼつて、そこで一つゆれて、それからだんだん上へゆくほど乱れて行くのが見えるではないか。

私はこの煙を見て、今まで思いがけぬことばかりなので、つい忘れていた煙草のことを思出した。そこで自分も一本を出して火

をつけた。それからどうかしてこの家のなかへ入って見たいという好奇心がどうもおさえ切れなくなった。さてつくづく考えるうちに、私は決心をした。この家の中へ入って行こう。留守中でもいい這入ってやろう、もし主人が帰って来たならばおれは正直にそのわけを話すのだ。こんな変った生活をしている人なのだから、そう話せば何とも言うまい。かえって歓迎してくれないとも限らぬ。それには今まで荷厄介にしていたこの絵具箱が、おれの泥棒ではないという証人として役立つであろう。私は虫のいいことを考えてこう決心した。そこでもう一度入口の階段を上って、念のため声をかけてそつと扉をあけた。扉には別に錠も下りてはいなかったから。

私は入って行くといきなり二足三足あとすだりした。何故かとうに入口に近い窓の日向に真黒な西班牙犬スペインけんがいるではないか。

顎あごを床にくつつけて、丸くなって居眠していた奴が、私の入るのを見て狡ずるそうにそつと目を開けて、のっそり起上ったからである。

これを見た私の犬のフラテは、うなりながらその犬の方へ進んで行つた。そこで両方しばらくうなりつづけたが、この西班牙犬は案外柔和な奴と見えて、両方で鼻面を嗅むぎ合つてから、向むかうから尾を振り始めた。そこで私の犬も尾をふり出した。さて西班牙犬は再びもとの床の上へ身を横よこえた。私の犬もすぐその傍へ同じように横になつた。見知らない同性同士の犬と犬とのこうした和解はなかなか得がたいものである。これは私の犬が温良なものにも因よ

るが主として向う犬の寛大を賞讃しなければなるまい。そこでこれは安心して入って行つた。この西班牙犬はこの種の犬としてはかなり大きな体で、例のこの種特有の房々した毛のある大きな尾をくるりと尻の上に巻上げたところはなかなか立派である。しかし毛の艶つやや、顔の表情から推して見て、大分老犬であるということは、犬のことを少しばかり知っている私には推察出来た。私は彼の方へ接近して行つて、この当座の主人である彼に会釈するために、敬意を表するために彼の頭を愛撫あいぶした。一体犬というものは、人間がいじめ抜いた野良のら犬でない限りは、淋しいところにいる犬ほど人を懐なつかしがるもので、見ず知らずの人でも親切な人には決して怪我けがをさせるものではない事を、経験の上から私は信じて

いる。それに彼らには必然的な本能があつて、犬好きと犬をいじめる人とは直ぐ見わけけるものだ。私の考は間違ではなかつた。西班牙犬はよろこんで私の手のひらを舐めた。

それにしても一体、この家の主人といふのは何者なのであろう。何処へ行つたのであろう。直ぐ帰るだらうか知ら。入つて見るとさすがに気が咎めた。それで入つたことは入つたが、私はしばらくはあの石の大きな水盤のところちよりつで立たしたままでいた。その水盤はやつぱり外から見た通りで、高さは膝ひざまで位しかなかつた。ふちの厚さは二寸位で、そのふちへもつてつて、また細い溝みぞが三方にある。こぼれる水はそこを流れて、水盤の外がわをつとつてこぼれてしまうのである。なるほど、こうした地勢では、こうし

た水の引き方も可能なわけである。この家では必ずこれを日常の飲み水にしているのではなからうか。どうもただの装飾ではないと思う。

一体この家はこの部屋一つきりで何もかもこの部屋を兼ねているようだ。椅子いすが皆で一つ……二つ……三つきりしかない。水盤の傍と、ファイヤプレイスとそれに卓に面してと各一つずつ。どれもただ腰を掛けられるというだけに造られて、別に手のこんだところはどこにもない。見廻しているうちに私はだんだんと大胆になつて来た。気がつくとその静かな家の脈搏のよう時計が分秒を刻む音がしている。どこに時計があるのであろう。濃い樺色の壁にはどこにもない。あああれだ、あの例の大きな卓の上の置時

計だ。私はこの家の今の主人と見るべき西班牙犬に少し遠慮しながら、卓の方へ歩いて行つた。

卓の片隅には果して、窓の外から見たとおり、今では白く燃えつくした煙草が一本あつた。

時計は文字板の上に絵が描いてあつて、その玩具のような趣向がいかにもこの部屋の半野蛮な様子に对照をしている。文字板上には一人の貴婦人と、一人の紳士と、それにもう一人の男がいて、その男は一秒間に一度ずつこの紳士の左の靴をみがくわけなのである。馬鹿馬鹿しいけれどもその絵が面白かつた。その貴婦人の髻ひだの多い笹ひだべりのついた大きな裾すそを地に曳ひいた具合や、シルクハットの紳士の頬鬚ほおひげの様式などは、外国の風俗を知らない私

の目にももう半世紀も時代がついて見える。さて可哀想なはこの靴磨きだ。彼はこの平静な家のなかの、そのまたなかの小さな別世界で夜も昼もこうして一つの靴ばかり磨いているのだ。おれは見ているうちにこの単調な不断の動作に、自分の肩が凝って来るのを感じる。それで時計の示す時間は一時十五分——これは一時間も遅れていそうだった。机には塵まみれちりに本が五、六十冊積上げてあって、別に四、五冊ちらばっていた。何でも絵の本か、建築のかそれとも地図と言いたい様子の大冊な本ばかりだった。表題を見たらば、独逸語ドイツらしく私には読めなかった。その壁のところ、原色刷の海の額がかかっている、見たことのある絵だが、こんな色はキススアではないか知ら……私はこの額がここにある

のを賛成した。でも人間がこんな山中にいれば、絵でも見ていなければ世界に海のある事などは忘れてしまいかも知れないではないか。

私は帰ろうと思った、この家の主人にはいずれまた会いに来るとして。それでも人のいないうちに入込んで、人のいないうちに帰るのは何だか気になった。そこで一層のこと主人の帰宅を待とうという気にもなる。それで水盤から水の湧立つのを見ながら、一服吸いつけた。そうして私はその湧き立つ水をしばらく見つめていた。こうして一心にそれを見つづけていると、何だか遠くの音楽に聞き入っているような心持がする。うっとりとなる。ひよつとするとこの不断にたぎり出る水の底から、ほんとうに音楽が

聞えて来たのかも知れない。あんな不思議な家のことだから。何しろこの家の主人というのはよほどかわりもの変者に相違ない。……待てよおれは、リップ・ヴァン・キンクルではないか知ら。……帰って見ると妻は婆になつてゐる。……ひよつとこの林を出て、

「K村はどこでしたかね」と百姓に尋ねると、「え？ K村そんなところはこの辺にありませんぜ」と言われそうだぞ。そう思うと私はふと早く家へ帰つて見ようと、変な氣持になつた。そこで私は扉口とぐちのところへ歩いて行つて、口笛でフラテを呼ぶ。今まで一挙一動を注視していたような氣のするあの西班牙犬はじつと私の帰るところを見送つてゐる。私は怖おそれた。この犬は今までは柔和に見せかけて置いて、帰ると見てわつと後から咬かみつきはしな

いだろうか。私は西班牙犬に注意しながら、フラテの出て来るのを待兼ねて、大急ぎで扉を閉めて出た。

さて、帰りがけにもう一ぺん家の内部を見てやろうと、背のびをして窓から覗き込むと例の真黒な西班牙犬はのっそりと起き上つて、さて大机の方へ歩きながら、おれのいるのには気がつかないのか、

「ああ、今日は妙な奴おじろに駭かされた。」

と、人間の声で言ったような気がした。はてな、と思つてみると、よく犬がするようにあくびをしたかと思うと、私の瞬まばたきした間に、奴は五十恰かっこう好の眼鏡をかけた黒服の中老年人になり大机の前の椅子によりかかったまま、悠然と口にはまだ火をつけぬ煙草をくわ

えて、あの大形の本の一冊を開いて頁をくつているのであった。

ぽかぽかとはんとうに温い春の日の午後である。ひっそりとした山の雑木原のなかである。

青空文庫情報

底本：「美しき町・西班牙犬の家 他六篇」岩波文庫、岩波書店
1992（平成4）年8月18日第1刷発行

底本の親本：「佐藤春夫全集 第六卷」講談社

1967（昭和42）年9月25日発行

初出：「星座」

1917（大正6）年1月

※表題は底本では、「西班牙犬《スペインけん》の家」となっています。

入力：琴屋 守

校正：希色

2017年9月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

西班牙犬の家

(夢見心地になることの好きな人々のための短篇)

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 佐藤春夫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

Bilibili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>